春歌～ピンクの景色～

綺羅春香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春歌～ピンクの景色～

【Ｎコード】
Ｎ２８３７Ｄ

【作者名】
綺羅春香

【あらすじ】
いつも一緒だった、佳奈美、慶喜、誠架。この３人とはいつも一緒だった。だけどある日、そんな当たり前のことは無くなってた。だけど・・・朱里には・・・。

だいいちわ：ある意味プロローグ？

ーうちが高校1年の頃
七海朱里（ななみじゅり）（15歳）運命なんて信じてなかった。
幼稚園から一緒の慶喜（けいき）と誠架（かいか）そして佳奈美（かなみ）とはいつも一緒だった。
誕生日も何かとあれば皆で祝ってた。ーこんな事が続く・・・そんな思いだった。
なのに。高校に入ってからはそんな当たり前のことはなかった。
でも、佳奈美だけはいつも一緒にいてくれる人だった。
悩みだって聞いてくれるまるで朱里のヒーローのような人だった。
そして、朱里は高校に入る前のことを一つだけ覚えてる。
「あれだ・・・誠架と・・・。」
朱里には一つだけ思い当たる事があったのだ。

ー中学3年の冬。
「寒いね～。で？誠架どうしたのこんな所に呼び出して？？」
「まだわかんねぇのかよ。俺は・・・」
「俺は・・・？どうしたの真剣になって・・・誠架・・・」
誠架は朱里だけファミレスに呼び出したのだ。
「好きだ！！付き合ってくれ！！」
朱里はびっくりして
「・・・やだな～。冗談でしょｗｗ」
「冗談でコクるかよッ・・・！！」
誠架は朱里にキスしてしまった事。
そんな事をまだ身にだしていなかったから。

「・・・誠架・・・。」
慶喜とは何の記憶もない。

一緒に笑って、誕生日パーティーした・・・それだけ記憶にある。
・・・他は？
そんな・・・覚えてもいないよ・・・
朱里には何も記憶はない。
「・・・朱里～・・・あたしね・・・」
佳奈美が言い出した。
「・・・ん？」
「・・・いつか、いつかいうぁwやっぱし。」
「・・・何それ！！ちっとむかつくのはどうして？！」
「いつか・・・いつかねww」
朱里には秘密はない。今じゃ佳奈美と誠架と慶喜にはきっと秘密があるのだろう。
・・・自分だけ置いてかれているのは気のせいなんだろうか。
あたしは健全な、女だよ・・・。
皆は何かあるのだろう。
ーそうだ。うちも作ろう・・・うそを付く？それとも、・・・
誠架を使おうか、慶喜を使おうか。佳奈美を・・・使おうか。
て、・・・
そんなこと考えても、意味がない・・・もう、仕方ない。
やめる・・・と思った瞬間・・・誠架のことをたまに思うと”ドキッ”と思うのはなぜだ・・・。
そうだ。取って置きの秘密を考えた・・・。
ウチは、誠架が好き。

ーあぁ、こんなこと考えなかった・・・のかも。
後から後悔を思ってしまう・・・そんなことを思ってしまうのかも知れません・・・。

だいにわ：裏切り？（前書き）

読者への警告

このへんから１５Ｒになってきますので
あまり苦手な方はお断りします。

綺羅春香

だいにわ：裏切り？

嘘をついた。
「好き・・・」でもないかもしれない。
ただの幼馴染・・・そう思ってたから。
「・・・はぁ。」暇。
朱里は思ってみた。
嘘ついても何もないってことを。
「ぁ。誠架に告んなくてはッ！！！」あぁ。また無意味なことをする・・・朱里ちゃん??意味ないですよ。ぉーぃ！朱里ちゃん?
朱里はサッサと誠架の家まで直行で行った。

「誠架！！いる?」　朱里ちゃん・・・最近話していないんだから・・・。

ガチャッ
ドアが開いた。
「・・・朱里・・・?」久しぶりに聞く誠架の声・・・。
あぁ・・・・ストーリーが・・・。
「あ・・・あのね・・・」気づいてみたら告白って・・・どきどきするね。
あたし、本当に誠架が好きみたいにどきどきしてる・・・。
「・・・ッあれ〜〜〜??朱里ｗｗどうしたの??」
・・・・え?佳奈美・・・?
思わず目をまん丸にしてみた。
なんで・・・。そういえば誠架て・・・一人暮らしだったけ。
親がいないのにどうして二人っきりで・・・誠架の家に・・・
驚きが隠せない朱里。
「佳奈美・・・ど・・・うし・・て・・・ここ・・に。」

震えた声でつぶやいた。
そりゃみんなだって驚くよね。
密室の部屋で好きな人が（？）が親友と二人っきりなんて・・・。
今の朱里には、挙動不審（きょどうふしん）という言葉がピッタシ。
「朱里・・・ごめんねwまぁ。用はどうしたの？誠架！！早く来て！！」
目の前が真っ暗に感じた。
「帰るね・・・。」
「おい・・・。朱里・・・待てよ！！」
「朱里・・？」
うるさいうるさい。
裏切り者！！佳奈美のばかばかばかばかばかばかばかばかばかばかばかばかばかばかばか
・・・・・・・・・・・・・沈黙。
誠架・・・・・・・・・。
次の日・・・
ピンポーン・・・
誠架の家。
やっぱし、今日も佳奈美、いるのかな。
がちゃっ
「朱里・・・。」
「誠・・・架・・・いる？佳奈美・・・。」
「いないけど・・・どうしたん？」
誠架ってね。とっても本当は優しいんだ。
中学のとき夜遅くまで居残りがあったとき塾の帰りに１０分くらい待っててくれたり・・・
あれ。それは誠架が好きでいてくれたからかな。
まぁ、あの時はすごく優しかった・・・。
「寒いだろ。上がってき。」
「うん。ありがとぉ」

がたん。
これで2回目誠架の家に入るのは。
つううん。
あれ。こんな香りしたっけ。
・・・。
久しぶりすぎて前の家の風景が思い浮かばない・・・・
「朱里・・・・」
「・・・誠架？」
「・・・ッで、用は？」
「ぁ・・・」
ドキドキ・・・してる・・あたし・・・誠架のこと本当にすきなの？？
「・・・す・・・いか！！！」
「はぁ？！」
そりゃ急にすいかとか言われたらびっくりするわ。
「好き？」
「え・・・」
誠架・・・まだぅちの事思っててくれていたの？？
「誠・・・架が？？」
「お前が。」
「「・・・」」
沈黙2だ・・・
「俺はなッ！！あの時ふられたから・・・」
「だよね！！！・・・うち・・・でも今思ってみたら・・・誠架のこと・・・」
「・・・。」
誠架は優しく笑ってふッと樹里の事を抱きしめた。
「・・・誠架？？」
「好きだよ・・・」
でもちょっとダケ不安なんだよ。

なんで・・・あの時佳奈美といたの？
誠架。誠架・・・嘘じゃないよね??
誠架は言われるまま（？）に樹里にキスをした。
嘘。うちが嘘ついてんじゃん。

だましたの・・・？うちが誠架のこと・・・好きだよ・・・誠架・・・
・

あなただけを、愛してもいい??

そして

樹里の目から大きな涙がひとつ流れていた。

だいさんわ：初でーと

眠い・・・眠すぎる・・・・・・・・

「・・・朱里ぃ・・・起きろ！！」

「ニャッ・・・・・・・・・・・・・・・・・？！」

あれ・・・ここは・・・あ。そういえば今日は誠架との初デート・・・・・

祝ｗｗｗｗｗｗｗｗ

じゃなくて・・・いやぁ。ここまでどき×０２するとは・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・グゴォ・・・」

「朱里？！？！？！」

昨日服を選びすぎて眠い・・・・・・・てそういうのよく漫画であるような・・・・

まぁ。服はちがうけど・・・髪の毛何にするか決めてて時間が・・・

じゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃーーーーーーーーーーーーーーん

「キャア！！！！！！！！！！！」

「あっはははははははっはははははははっはははははははっはははははっはっははっは」

「・・・・誠架・・・殺す！！」

車の音を急に大きくして耳がキンキンする・・・もう誠架ったら！

「お前が寝るからだろ！初でーとでいびきかいてパンツ丸見えじゃムード台無しだろ？」

・・・・いびきかいてた・・・？・・・・パンツも丸見え・・・え・・・え・・・え

「えぇぇっぇえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっぇええええええ！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「「はぁはぁ」」

車がうるさい・・・まぢうるさい・・・

じぅあかじゃかじゃん

うわぁ。●ィズニーランド（ゆうえんち）・・・てこんな大きかったけ??

誠架がいるから大きく見えるのかな??

ありがと・・・誠架・・・

「うぇすげーいるやん」

「乗ろう!!乗ろ!速く・・・」

「う・・・・ん・・・・・・」

きらぁぁぁ

何かの結晶・・・・

キレイ・・・・・・・・・・・・・誠架はどう思ってんのかな・・・・?

「誠架ーーー!!見て!これこれ!!」

「あぁ?」

「かわいいねw」

「・・・お前のが可愛い（きれい）・・・・・・・・ん・・ッ何でもねぇッ！！！！」

・・・・・・・・・・・・・え・・・・？今なんて・・・

可愛い？？可愛いだって？？？

きゃぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「うんwありがとぉw」

にっこり笑う朱里に誠架はこう言った。

” 後でお楽しみがある”

と・・・・

「え・・・・・？」

「だからなんでもねぇよ・・・ッッッ！！」

「・・・・うん・・・・うん！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「¥２５０００です。」

ホテル代・・・ホテル？？

えぇぇぇぇ？！私・・・・・・・・・・・・誠架と・・・・（（

「朱里・・・・行くぞ」

「ぁ・・・・・ぅん」

やだ・・・なんか気まずい！！そんな・・・・泊まるとは聞いてたけど・・・・

ホテルって・・・・・変な妄想しちゃう・・・・

誠架・・・・・・

「いたッ誠架・・・手・・・痛いよ・・・・・」

「えっ・・・・あ、ごめん・・・・」

誠架の手・・・汗びっしょり・・・誠架も緊張してるんだぁ・・・

預けなきゃ・・・誠架に・・・・私の・・・

がたんッ・・・・・・・・・・・・

「・・・・誠架・・・・・？」

「はぁ・・・・ごめん・・・・」

「え？」

「変な想像してたやろ」

「やぁ・・・・・・・・・誠架のせいだよッ！！！！！」

「あはは～んじゃぁ・・・・・・お前はしたいんだ～～～」

「えぇ・・・・別に・・・・どっちでも・・・・・」

「・・・・・する？」

真っ赤な朱里にうわずかいでいう。

―うちは・・・本当に誠架とやってもいいのかな？

だいさんわ：初でーと（後書き）

感想まぢオネガイシマス！！

だいよんわ：未遂１（前書き）

感想ください！！！！

だいよんわ：未遂1

●ィズニーランドのホテルで……何をする？

「朱里…やる？」

「…うん……。」

ギシッ……

ベットのネジが鳴る。

「脱がして欲しい？」

「え……う…んッ。」

どうしよ

恥ずかしい！！

……誠架…ならいいや……誠ッ

まぢ…どうしょ！！

「誠架ッ！！」

「朱里？？？」

「い・・・ぁ・・・だッ！！」

「あ？」

「あ・・・ごめん・・・」

まぁ。いいや・・・・・・・・・

ギシッ・・・

誠架が・・・近くに来る・・・・・・

誠架は朱里にそっとキスをした。

「・・・・・・・・・ッッッッッ。」

だが、いくら待っても誠架は本気モードで来ない。

「・・・・・誠架・・・やんないの？」

「・・・・・・・・・・ごめん。」

「え？」

「俺ッ・・・佳奈美としたんだ。」

「えっ・・・・・」

「付き合ってたんだ。朱里に告ってから・・・」

「佳奈美と？佳奈美はうちらが付き合ってること言ったの？」

冷静に聞く朱里。

あれ？聞くのが怖い……

「……言ってない……」

「ひど……い……」

「ごめん……」

「ねぇ……誠架はあたしと……佳奈美…どっちを選ぶ？」

「朱里だよまぢで…」

「誠架……信じていい？」

あの時本当に信じちゃたよ……誠架…あなたが好きだよ。この気持ちは嘘じゃないよ？？

だいごわ：未遂２（前書き）

遅くなってスイマセン。
最後まで読んでくれたら幸いです。

だいごわ：未遂2

チュンチュンチュン・・・・

佳奈美と会うのが辛い。。誠架と会うのが一番辛いハズなのにね・・・

「朱里？」

無視。朱里にぁこの選択しかなかったのだ。

「ごめんな・・・・朱里・・・・」

誠架は見たことのない顔で落ち込んでいる。

朱里ぁなぜか急に起き上がって洗面所に向かった。

「誠架・・・うち・・・誠架のこと信じていいんだよね。。」

「え？」

誠架はあほなのだろうか？朱里の言ったことがイマイチ理解できていないようだ。

「あたしぁ・・・っ誠架のこと大好きだよっ？？でもッ・・・――――」

朱里の話は途切れた。

プルルルプルルル・・・・・

誠架の携帯がなった。

この空気で、電話を取るのは厳しいだろう。

「いいよッ・・・・出てよ・・・・・」

誠架はすぐに電話を取った。

「もしもし。」

「・・・・・・誠架??佳奈美だよ・・・・?」

「・・・・・え?」

一番驚いているのはきっと朱里。

「あのね・・・・・・」

「佳奈美・・・別れようぜ?」

「・・・・何で?あたし・・・・・朱里?朱里がいいの?そんなに??」

「ごめん。いいから別れよう。。。」

ガチャっ・・・・・・・プープー・・・・

「誠架？なんで？？？そうなるの？？」

「お前じゃなきゃ・・・・俺・・・俺・・・」

誠架は朱里の両手を押さえて無理やりキスをした。

「ッッ！～～～～っ！！」

何秒だっただろうか。１０秒。いや３０秒たった時、誠架は、ようやく手を離した。

「俺のこと・・・・嫌いになった？？」

「はぁ。・・・・はぁ――――はぁ・・・」

「朱里・・・・・」

なる訳ないじゃん。そういいたかった。

「嫌い・・・だょな？」

「はぁ。・・・・何で？？」

「俺はお前が好きなんだよ。どうしようもないくらいにッ・・・キスだって毎日したいし、
セックスだって。お前と一緒にずっといたいんだよッッ――――」

「うちだって・・・・そうしたいけど・・・・ッ」

「・・・・・・・・・・別れよ？」

「やだっっっ！！！！！！！！！」

「どうしようもできない俺に・・・・・朱里と一緒にいる資格なんて、ねぇよ・・・・」

やだ。わかれたくない。それだけはいや。絶対にいや！！！！！

「責任取ってよ！！あたしは・・・・誠架といられるだけでいいから！！」

朱里は顔がグチュグチュになっても誠架から離れようとしない。

「嘘だよ・・・・・お前と離れる訳ねぇだろ。」

「誠架・・・・・」

誠架は朱里を慰めるようにだいた。

だいろくわ：三角関係

あの日から一週間・・・――

春休みだったので佳奈美と会うことはない。

だが。

チャラチャラチャラ・・・・

このメールの着信音は・・・・・。

――佳奈美だ。

メールをみるのが怖い。朱里は何秒か待ってからみた。

ドクンドクン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・――。

――

TO：佳奈美
件名：無題

朱里～～～～～♪

きょぅぁそべなぃ？てかぁw池袋ぃかなぁぃ？？
新学期のアイテム買いに～♪

――

・・・・佳奈美と会うのは辛い。行けないよッ・・・
・・・・・・・・あれ？続きがある・・・・？

新学期のアイテム買いに～♪

・・・・・・・あたし、誠架好きなんだw・・・朱里。
応援してくれるよね？？？

ＥＮＤ

・・・・・・・・・・・・・作戦？・・・・・・・・・佳奈美が・・・
・・・動き出した・・・

佳奈美は昔っから何かと予言しておくタイプだ。

どうし・・・ッ

携帯が鳴った。プルルプルルプルルプルルプルル・・・・・

佳奈美。この着信音は佳奈美だ。

出るしかない。逃げるな・・・朱里・・・！！

ガチャッ

「朱里？？？？メールゥ返してよッもうッッ」

「・・・・・・う・・・・・・・・うん」

「・・・・・元気なッ！！！！どうしたん？？」

「あたしもッ・・・・・・誠架・・・・・・・」

「・・・・・好きなんでしょ？」

「・・・・・・え？」

「あたしもだけど・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・ごめんッ佳奈美・・・・・・」

「・・・・・・・別に。ってかあんたって重いから多分・・・・・ムリでしょ。誠架はうちみたいに強い女が好みだと思うよ？」

だいななわ：失い。

「・・・・・・・・・・・・ってか誠架はうちみたいな強い女のが好みだと思うよ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ェ？・・・・・・・・・

佳奈美・・・・・？！

「え・・・・・佳奈美・・・・・ッ？」

ガチャッ・・・・プープー・・・

「・・・・・・嘘・・・・・・・・佳奈美・・・・・・・がァ？」

朱里はポロッと大きな涙をこぼした。

「・・・・・・・・・・・・あたし・・・・・重いんだ～・・・」

「朱里・・・・・のバカッ・・・・・」

あんたなんか現れなかったら・・・あたしはッ・・・・・・・・・！！！！

誠架と・・・・・・・・・・・・

「おーい。朱里ー」

誠架の声だ。

出たくない。

辛くなる。

佳奈美を思い出しそうになる。

大切な友達・・・・を失くす気がする。

・・・・・・・・・・・やだ。

ごめんッ。

シャッ！

朱里はカーテンをしめた。

「・・・・・朱里？」

誠架は不思議そうに見ていた。

ＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩ・・・・――――――♪

・・・・え？

誠架？！

やめてよォ・・・・・；；

ＰＩッ！

「え？着られた・・・・・！？」

誠架は諦めて帰っていったのを見てからカーテンを開けた。

・・・・・・・・恋愛も友達も壊したんだ。

最初は嘘で始めたのに・・・・。

なんで。

こんなふうになったんだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2837d/

春歌～ピンクの景色～

2010年10月16日00時09分発行